

第18回熊本大学附属図書館貴重資料展・講演会より

中世阿蘇社の世界

春 田 直 紀

阿蘇神社の宮司家に伝来した阿蘇家文書の大部分は戦後熊本大学の所蔵となり、1987年には国の重要文化財に指定された。阿蘇家文書は、南北朝期の九州の政治史を語るうえでもっとも重要な史料群として注目されてきたが、他方当文書が中世帳簿の宝庫である点も見逃すことのできない特色といえる。では、阿蘇家に伝来した多種多様な帳簿群は何を目的にして作成されたのだろうか。それは第1に神が鎮座する神殿を造営・維持するためであり、第2に神を祭る儀式を行うため、第3に造営や祭礼に必要な負担を郷村から確保するためであった。この3つの事業がそれぞれの働きを十分に発揮したところに、中世の阿蘇社が目指す理想的な世界があったはずだが、果たして現実はどうであったか。

今回は中世阿蘇社の全体像を示すために、「阿蘇社縁起絵巻断簡写」、「阿蘇社造営記録」、「阿蘇社四季神事諸役次第」、「阿蘇社領郷々注文」など造営・神事・社領郷村に関する基本的な帳簿を選んで展示した。11月2日の講演で話した要点は次のとおりである。中世の阿蘇社は社領内に郷や村といった行政単位を設け、社の存続にかかわる造営や神事に必要な物資や労働力は、阿蘇谷を中心とする身近な領内の郷村から確保する体制を志向していた。そのために採用されたのが阿蘇社独自の公田制である。各郷村には年貢田とは別に阿蘇社の造営・神事の経費負担を課す公田が設定され、公田の知行者である武家給人や社家が阿蘇社に奉

仕する体制が14世紀には確立している。しかし、こうした阿蘇の神々を支える仕組みもトップダウン方式のままでは十分に機能しなかったのであり、郷村支配を担当した中司は「現実の姿」の把握と「あるべき姿」の確認とを交互に行いながら、社領経営を進めていったことを指摘した。

なお、今回の資料展と講演の準備においては阿蘇家文書の原本調査を実施し、多くの成果を得ることができた。とりわけ帳簿には追筆や訂正が多く、原本でないと検証できない情報が少なくない。今後史料調査が本格化し、研究が進展することを希望している。

(はるた なおき 教育学部助教授)



貴重資料展

講演会

